

■内田正雄 幕末の海軍士官で明治初期の翻訳家。「輿地誌略」「西洋史略」など文明開化啓蒙者として多大の貢献。

うちだまさお

適塾ホヰン・ 1838＝ 小普請組百俵取の幕臣万年三郎兵衛の次男に生まれる。幼名は恒次郎。

阿部正弘首座1845＝ 7歳：

・ ・ ・ ・ ・ 1847＝ 9歳：

幼いころより学問を好んで神童と呼ばれる一方、

ペリー来航・ 1853＝15歳：

剣術家としても知られる。

松下村塾・ ・ 1856＝18歳：

蕃書調所・ ・ 1857＝19歳：

昌平饗甲科及第で秀才を謳われ、坪井信良の塾で赤松則良からオランダ語を手ほどきされ、海軍伝習生として長崎へ赴き、航海術と測量法の修業をしながら、オランダ人教師から語学・世界地理・西洋数学を学ぶ。

安政の大獄・ 1859＝21歳：

伝習所廃止後も、しばらく長崎で微分・積分など数学の個人教授を受けたのち、帰府、築地軍艦操練所教授方手伝出役を命ぜられ、咸臨丸には選抜されなかったが、

桜田門外変・ 1860＝22歳：

遣欧使節・ ・ 1861＝23歳：

生麦事件・ ・ 1862＝24歳：

旗本千五百石の内田主膳の婿養子に入り、正章と名乗る。部屋住みながら小姓組に属し、*手伝から教授方に昇格、改制で軍艦組出役となり、アメリカ派遣が決定するも、南北戦争で変更され、*オランダへの軍艦発注に伴い、15人の留学生の取締役として出航。ボルネオ島の近海で海難事故に遭い、

8月18日政変 1863＝25歳：

禁門の変・ ・ 1864＝26歳：

ロッテルダムに到着。榎本武揚・沢太郎左衛門・田口俊平との4人で、ディノー海軍大尉から船具・砲術・運用を学ぶ一方、資金の管理、第2回遣欧使節団の応接、パリ万博の幕府側出品交渉などをこなし、*建造中の軍艦に(開陽)と命名。フランスへ出張してフランス海軍の動向を視察し、イギリスにも出張したほか、美術にも強い関心を抱き、油彩画などを購入、明治初期の貴重な西洋画教材となる。

薩摩藩士密航1865＝27歳：

薩長同盟・ ・ 1866＝28歳：

大政奉還・ ・ 1867＝29歳：

明治維新・ ・ 1868＝30歳：

完成した軍艦(開陽丸)に乗り組み、往路のコースを戻す形で、50日かけて、横浜へ帰還した。帰国後、軍艦方へ戻る。おそらく勝海舟と連絡があったため、*御軍艦組頭並となったところで維新になり、海軍を除隊し軍事職を辞任、名を正雄と改める。新政府から

戊辰戦争終・ 1869＝31歳：

初の日刊新聞1870＝32歳：

大学少丞、大学中博士と開成学校の教務幹部を務めながら、「和蘭学制」を訳して列強の教育制度を紹介し、翌々年にかけて、欧米海軍比較史と現状をまとめた「海軍沿革論」を刊行、*ロンドンで発行された年鑑をもとに「海外国勢便覧」刊行。以降7年かけ、詳細かつ最新世界地理書「輿地誌略」11巻12冊を刊行、教科書としても使われ、15万部以上売れたベストセラーとなり、福澤諭吉「学問のすすめ」、中村正直「西国立志編」と並んで明治の三書と称される。

廃藩置県・ ・ 1871＝33歳：

学問のすすめ1872＝34歳：

大学が廃止されて新設された文部省の中教授から、編輯助となり、最初の官撰歴史教科書「史略」の半分を担当、適切に解説した「西洋史略」刊行。また美術への見識を買われて

明治6年政変 1873＝35歳：

佐賀の乱・ ・ 1874＝36歳：

初の民間工場1875＝37歳：

三つの内乱・ 1876＝38歳：

行政よりも著述に志向してか、依願退官し、以後、地理学に深化、翻訳著述に専念しながら、「地理教授本」を刊行、昌平坂書画展に自作や渡欧中に収集した油絵を出品するなどし、「輿地誌略」の巻8,9を自ら経営する出版社から刊行、教師用の「地学教授本」も刊行するが、*病に罹り、没した。「輿地誌略」の巻10が遺作となり、巻11は西村茂樹によってまとめられた。